

「郵趣遍歴」(3)

使用済田型の収集(3)

私の先輩に当る多くの収集家は、日本切手に限らず、全世界の切手をゼネラルコレクションとして持っていた。これは、収集家として当然のこととっていたが、最近はその人々には、ほとんどお目にかかれなくなった。

しかも、日本切手の中でも、特定のシリーズだけとか、更にもその中でも特定の額面だけとか、対象を狭める人の多いのには驚かされる。趣味の世界のことだから、対象を広げる方が、より楽しみは増えると思うのだが。

使用済田型についても、外国切手で考えてみると、様々な事例があって、単片では経験できない面白さを、田型となると発見できることがある。例えば、隣接する切手同士の間隔などである。いわゆるガッターの間隔は、実用版の製版方法や、シート上での位置の違いなどを知るヒントともなっている。

また、目打については、単片の場合に変造される危険性が高いことは、今や世界的にも知られるようになった。これに対して、田型の場合には、切手間のガッターにある目打穴は、変造が不可能のため、その分信頼性が高くなる。そこで、市場の評価も、単片の10倍以上というのは、常識となりつつある。

更に、使用済となると、消印もまた問題となる。日本では、単片上の消印ばかりが、もてはやされる傾向にある。ところが、多くの場合、単片上では消印の完全印影は確認しにくい。その点田型となると、面積が4倍になったために、多くの使用済では、消印の完全印影が鑑賞できる。

魚木五夫（日本郵趣協会名誉会員）



菊 50 銭

楕形目打 $12 \times 12\frac{1}{2}$

TOKIO, 1912 年 ? 月 ? 日



田沢 8 銭

滋賀・中之郷

大正 13 年 2 月 5 日



田沢 1 銭

シンガポール・バクポー印

1937 年 7 月 25 日